議会だより 第50号

内子町議会議員研修の報告

内子町議会各常任委員会が1月25～27日にかけて行った所管事務に関する行政視察研修について報告します。

議会の活性化と消防・防災の取り組み

総務常任委員　山田　博文（ひろふみ）

◇御船町議会研修

熊本市の東南16・6キロに位置する御船町は、面積99平方キロメートル、人口約1万8000人の第一次産業中心の町です。平成の合併に向け進んでいましたが、2004年の住民投票で8割の町民が反対したため単独町政にかじを切り、執行部と共に議会も行財政改革に取り組んできました。07年の改選に合わせて定数を削減し、議会の1問1答方式を導入。北海道夕張市・ニセコ町・栗山町・小樽市で議会研修を行った後、住民団体から報告会の開催を要望されたことをきっかけに、翌年からは委員会ごとに各地区へ出かけて議会報告会を行っています。また10年からは、「あおぞら会議」として商工会・農業委員会・区長会・町づくりの会などと合同で会を開いています。

同議会では、要望や質問などの内容を①持ち帰り調査の上で報告するもの②執行部に提言するもの③議会で一般質問として取り上げるもの――に分類し、主なものに対する議会や執行部の回答を「議会だより」に掲載しています。さらに、町民と議会の意見交換会を経て10年3月議会で「議会基本条例」を制定。この中で、議会モニターを設置し、議会運営に関する要望や提言などを聴取しています。情報公開を徹底するとともに、町民に分かりやすく説明責任を果たす。このような会議を通して得た町民の意見を町政に反映し、町民と共に歩み、行動する議会の実現を目指しています。熱心に真摯（しんし）に町民に応えようという姿勢を感じ、大変有意義な研修となりました。

◇小国町防災研修

熊本県小国町は総面積136平方キロメートル、人口約8200人、スギ材などで知られる筑後川源流域、阿蘇外輪山の外側にある農山村です。1991年9月の台風19号で大きな被害を受けたことをきっかけに、「自分の地域、命は自分で守る」と自主防災組織の立ち上げに動き、92年に町全域で結成されました。翌年の災害ではその効果が現れており、合わせて倒木などが下流域に流れるのを防ぐスリットダムの効果が高く評価されています。

消防団員は366人で人口の割合からすれば多く、年齢も若いようです。また98年にFMおぐにを開局し、全戸にFM告知端末を配置しています。10年に光ファイバーを全戸につなぎ格安で運用するなど、恵まれたハード面とマンパワーの活力に感心させられました。

この研修の成果を議会活動に生かしていきたいと思います。

木材を活用した学校施設

文教厚生常任委員　下野　安彦（やすひこ）

◇宇目緑豊小学校視察

大分県佐伯市にある宇目緑豊小学校は、海抜240メートルの小高い丘を造成し建造された、温もり溢れる木の香る校舎です。

2010年4月に重岡小・小野市小・木浦小の3校が統合し、翌年から隣接する宇目緑豊中学校との小・中一貫教育を開始しています。児童生徒114人のうち60人がスクールバス通学で、少子高齢化はこの町も同じで、帰宅しても遊び相手がなく、児童クラブで夕方まで過ごしているということでした。

小・中一貫教育として、音楽や美術教諭は小・中学校を掛け持ちし、中学校での学習形態への急激な変化を緩和しスムーズな接続を図る協働指導体制が取られています。また特徴的な教育方針として、近くにアジア立命館大学があることもあり、外国語科（英語）に力を入れています。

統合時の苦労点などを質問したところ、PTAや保護者委員会、学校委員会を立ち上げ、2年間かけて地域性の違いを解消するためのコミュニケーション活動を行い、まとまりができてきたということでした。

建築に関しては、地場産業である林業を生かし、地元産の木材をふんだんに取り入れています。面積は体育館と合わせて3116平方メートル、総事業費約8億円。玄関や教室の、市有林から切り出されたスギ丸太がりりしく印象的でした。また広い廊下や全児童が集まることのできる中庭は各教室のどこからも見ることができ、教員にとっても安心・安全な校舎であるように感じました。

スギの丸太が印象的な宇目緑豊小学校舎

◇豊後高田市「昭和の町」視察

豊後高田市は、商業と観光を一体化した「昭和の町」として中心市街地の再生に成功し、年間40万人の観光客が訪れています。まちを担う40歳代の構想により9軒で始めた商店街の再生は広域観光にさらなる拍車を掛けているようです。

今回の研修を、これから建築される小田地区の幼・小・中学校や学校教育の場への助言・提言につなげていきたいと思います。またあらゆる意見に耳を傾け、若者の夢を叶えるまちづくりが大切だと感じています。

小水力発電導入の取り組み

産業建設常任委員　山上　芳子（よしこ）

◇日田市小水力発電事業視察

筑後川の上流に位置する大分県日田市は、市内各地に多くの河川や水路が存在することから古くから「水郷ひた」と呼ばれ、豊富な水資源に恵まれたところです。この水資源の有効活用を推進するため、2010年度に市内2カ所で小水力発電の実証実験を実施。その結果から、市内の河川や水路には小水力発電に最適な環境が多く存在することが確認でき、再生可能エネルギーの普及促進、二酸化炭素の削減、環境教育の場の提供、エネルギーの地産地消などを図ることを目的に小水力発電事業を展開しています。

ではなぜ、小水力発電なのでしょうか。同市では、①水の力を利用してタービンを動かし発電する小水力発電は、比較的構造が簡単で、設置する地形に合わせて発電機を製作できる②環境を壊さずに設置することができ、水質や水生生物の生態系に及ぼす影響も小さい③製作にやや時間を要するが、短期間で設置が可能である④発電中は二酸化炭素を排出せず、地球温暖化対策となる⑤行政が率先して再生可能エネルギーの普及促進に努めることで環境振興につながる――と述べています。

地域資源を活用した自然環境に優しい再生可能エネルギーの取り組みは、「エコロジータウン内子」を掲げる内子町でも、今後の環境政策の課題になるのではないでしょうか。

昨年3月の福島原発事故の発生以降、原子力政策の転換と再生可能エネルギーの推進が強く叫ばれる中で、小水力発電や太陽光発電の存在はますます重要になるといわれています。同市は、小水力発電事業の取り組みによって、市民や将来を担う子どもたちの一層の環境意識の向上に努めたいとしています。内子町も自然豊かな町です。恵まれた環境の中で生活する私たちだからこそ、もっと再生可能エネルギーの取り組みに関心を持っていきたいものです。